

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 6月12日 11:34AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 50,000~68,000 円
(TOPIX) 3400~4000

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000~52,000 ドル
(S&P500) 6300~7700

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500~30,800
(ナスダック総合) 20,700~27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000~160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000~100.650

エリオット波動とは

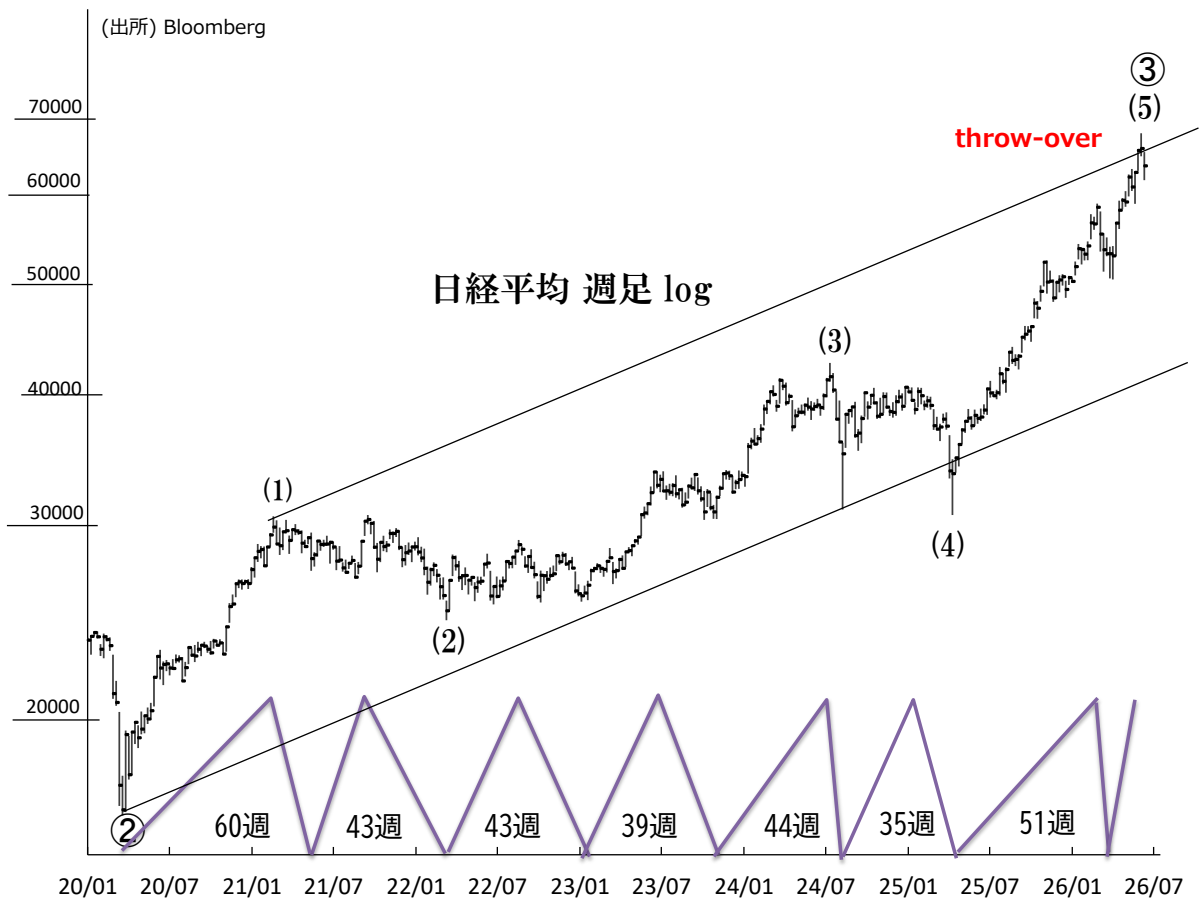
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

日経平均は、先週(6月1週)にチャネル上限を一時上回りましたが、今週はチャネル内に戻っています。12日終値がチャネル上限(66,958円)を下回っていれば、「スローオーバー」によるプライマリー第③波完成及び、プライマリー④波入りを示唆するものとなります。

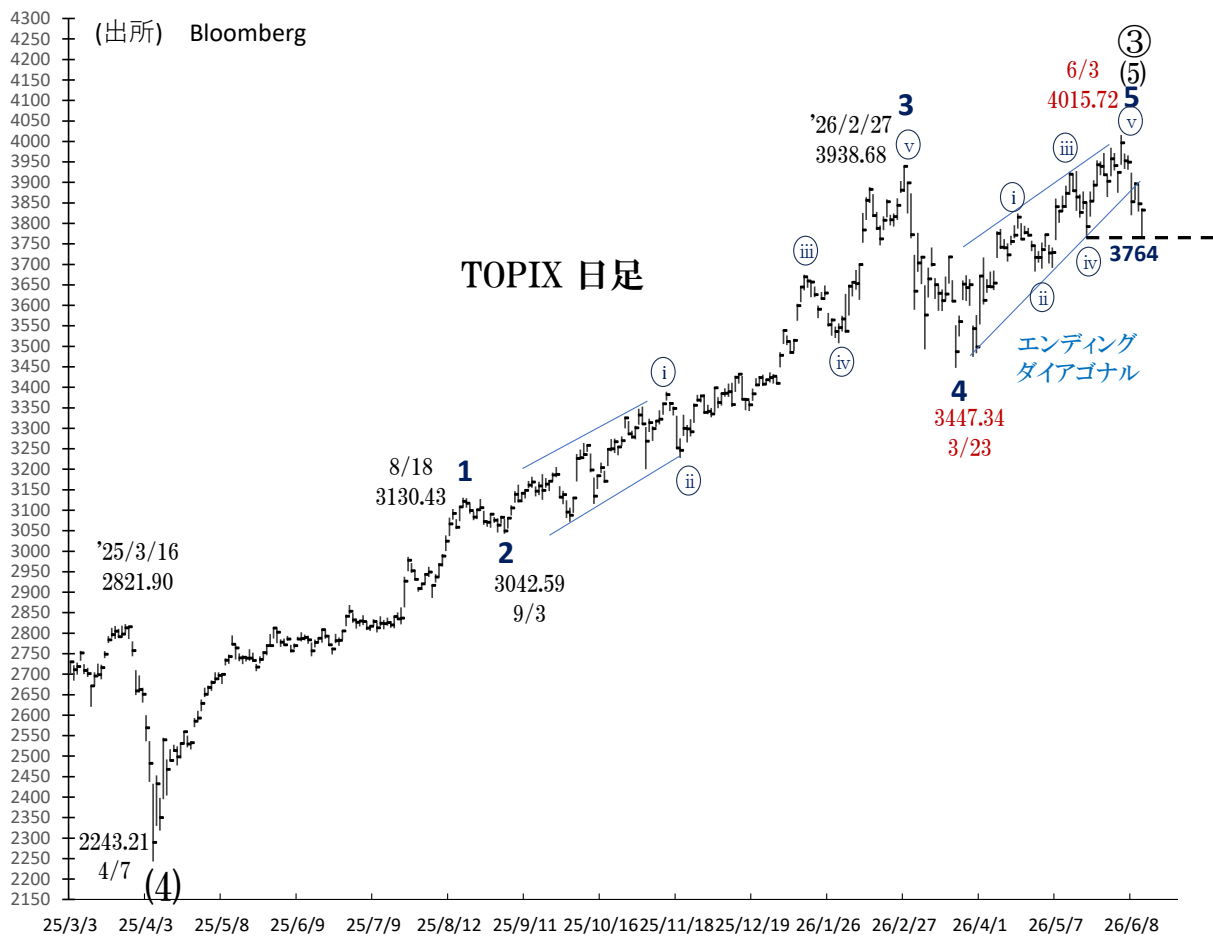
個人投資家は先週までに、AI・半導体を中心にレバレッジ買いを大きく膨らませました。

6月5日時点の信用買い残は6兆6958億円と、4週連続で過去最高を更新しました。さらに信用倍率は7.53倍に上昇しています(25年4月11日以来の高水準)。今週は高値圏での買いポジションに、相応の評価損が出ているとみられます。今後手仕舞い売りが進めば日経平均は一段と下げるでしょう。

3月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けるでしょう。

高値示現後は、年末～来年3月のサイクル終点に向け株価は下落基調を迎えるでしょう。

(※)週次サイクル期間(2020年以降の補正後)は45週±8週(37週～53週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は10%～26%(平均17%)。

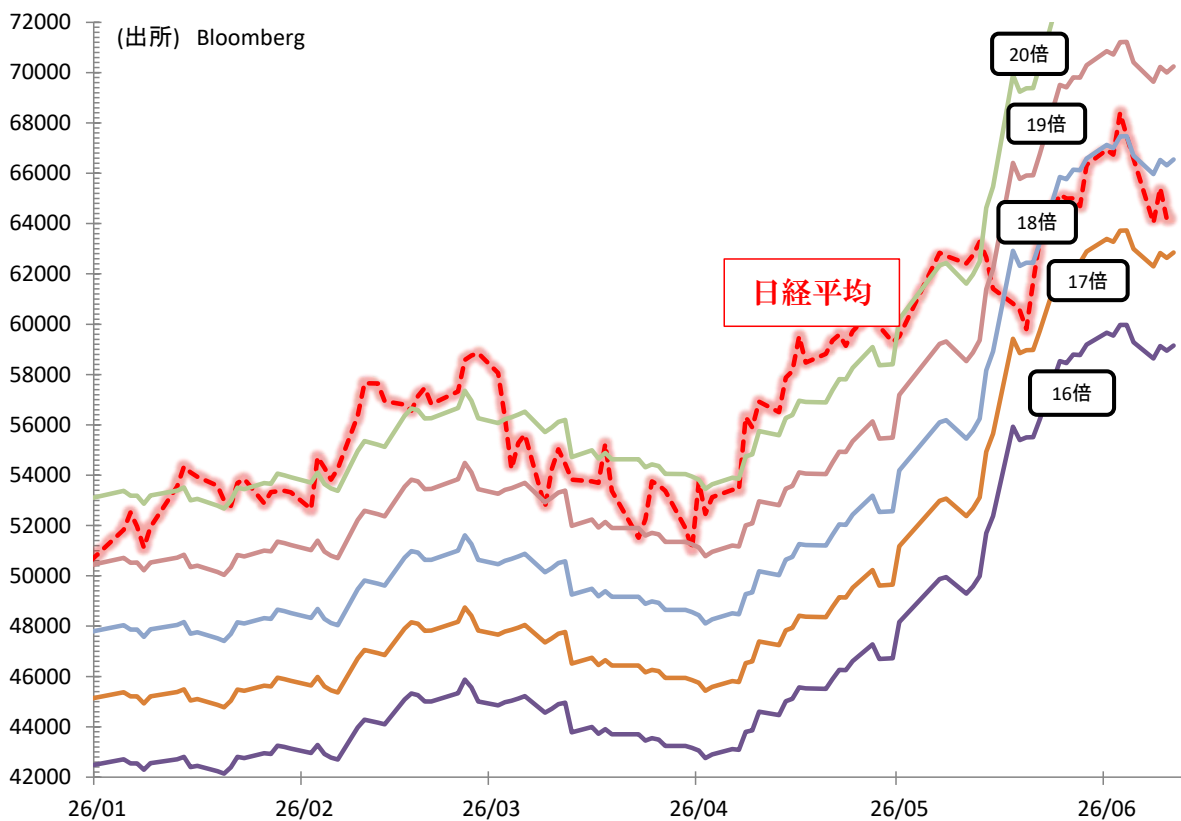


[TOPIX]

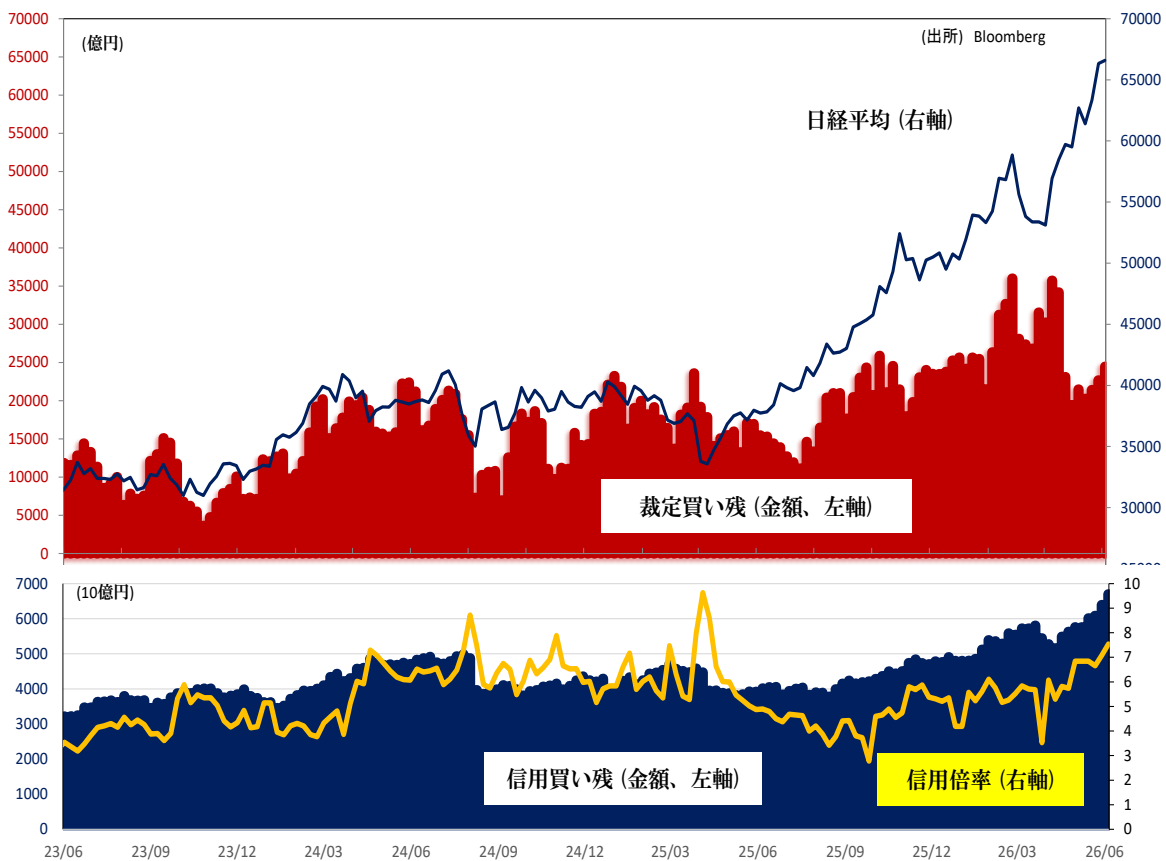
3月安値(3447)以来の「エンディング・ダイアゴナル」(転換パターン)から下放れを開始しました。
 6月3日高値(4015)を以て、コロナショック底から6年余り続いた強気トレンドは終わり、プライマリー④波の調整が始まった可能性があります。

6月11日は一時3766まで下げましたが、3764(5/20安値)の手前で下げ渋りました。
 短期リバウンドの後には下落に転じ、3764を下回ると下げ足を強めるでしょう。この場合TOPIXは、早々に3447(ダイアゴナル始点)に達するでしょう。

プライマリー④波に入ったという見方が正しければ、その調整規模はプライマリー①波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。



[裁定買い残と信用買い残] (6月5日時点)



NYダウ・S&P500



【NY ダウ 30 週足 エリオット波動長期分析】

2020 年底を起点とするプライマリー⑤波は「エンディング・ダイアゴナル」(強気相場の最後に現れる転換パターン)を形成しており、その完了は近いでしょう。

ダイアゴナル上限(49,976ドル)を週末値で割り込むと、スローオーバー(throw-over)が確認され、それは天井打ちの最初のサインです。

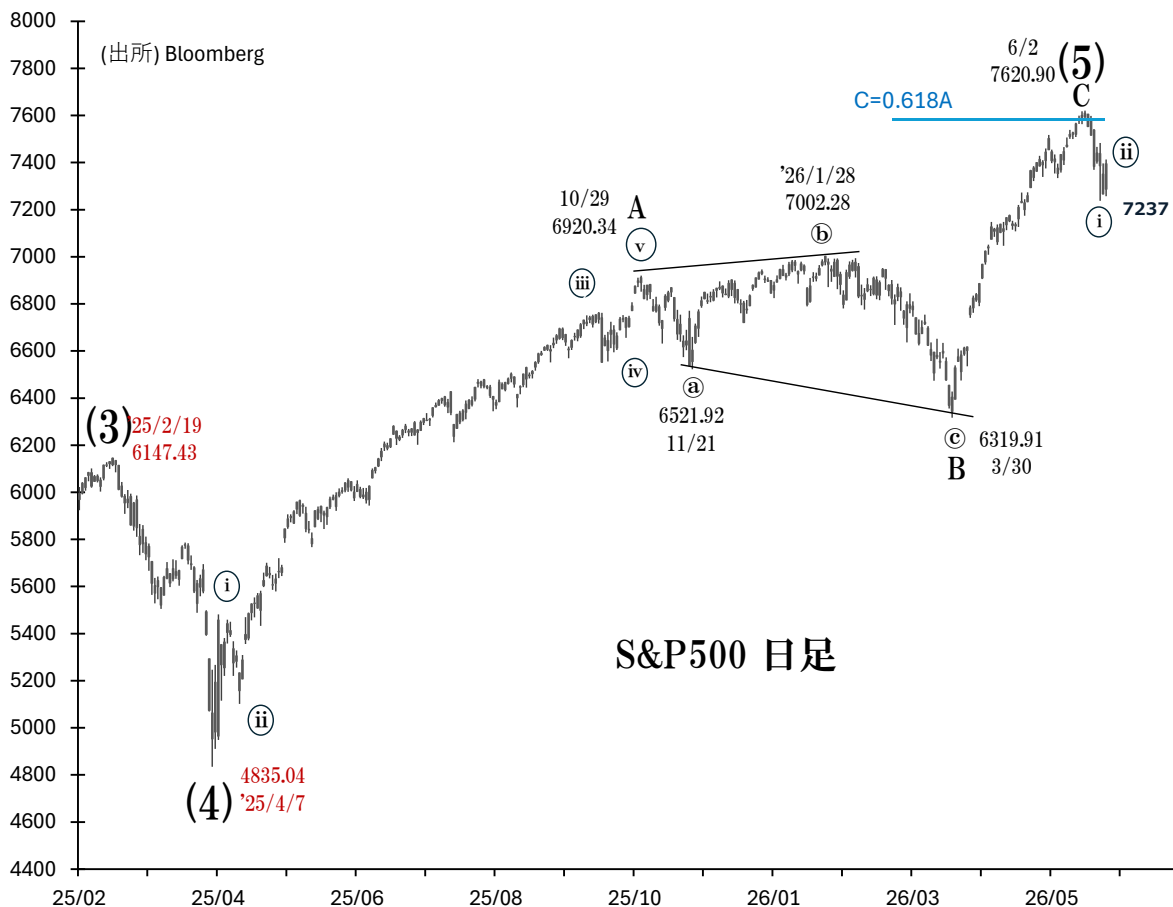
通算 6 年余りの天井パターンが完成すると、その後 2~3 年の内に NY ダウはパターン開始点(18,213ドル)へ向けて下げる可能性があります。

【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

6 月 11 日は一時 50,968ドルまで急反発しました。51,660ドル(6/5 高値)から 49,909ドル(6/10 安値)までの下げ 61.8%戻し水準[50,991ドル]にほぼ達しています。

次はマイニユート級マル iii 波の下落が想定されますが、それは 49,909ドルを明確に割り込むでしょう。

6 月 12 日(金)は注目のスペース X 上場(史上最大 IPO)、来週 16 日(火)に予想される日銀の利上げ、そして 19 日(金)のトリプルウィッチング(米国版メジャーSQ)など重要イベントが相次ぎます。これらが市場のかく乱要因となれば、ボラティリティの急上昇を招くでしょう。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6月2日高値の7620は、A波とC波が黄金比になる水準[7605]を満たすものであり、ピークアウトの可能性が高いとみられます。

6月9日には一時7237まで下げました。そこからの反発は、マル ii 波に位置付けられます。マル ii 波は[7416-7483]で頭打ちとなり、その後はマル iii 波で下落するでしょう。

SOX 指数は、6月3日に天井パターン「カラカサ」を示現し、調整局面に入ったと思われます。

11日には急反発しましたが、この日の高値は3日高値～9日安値の61.8%戻し水準に一致します。この付近でリバウンドが完了する否か、注目されます。



Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

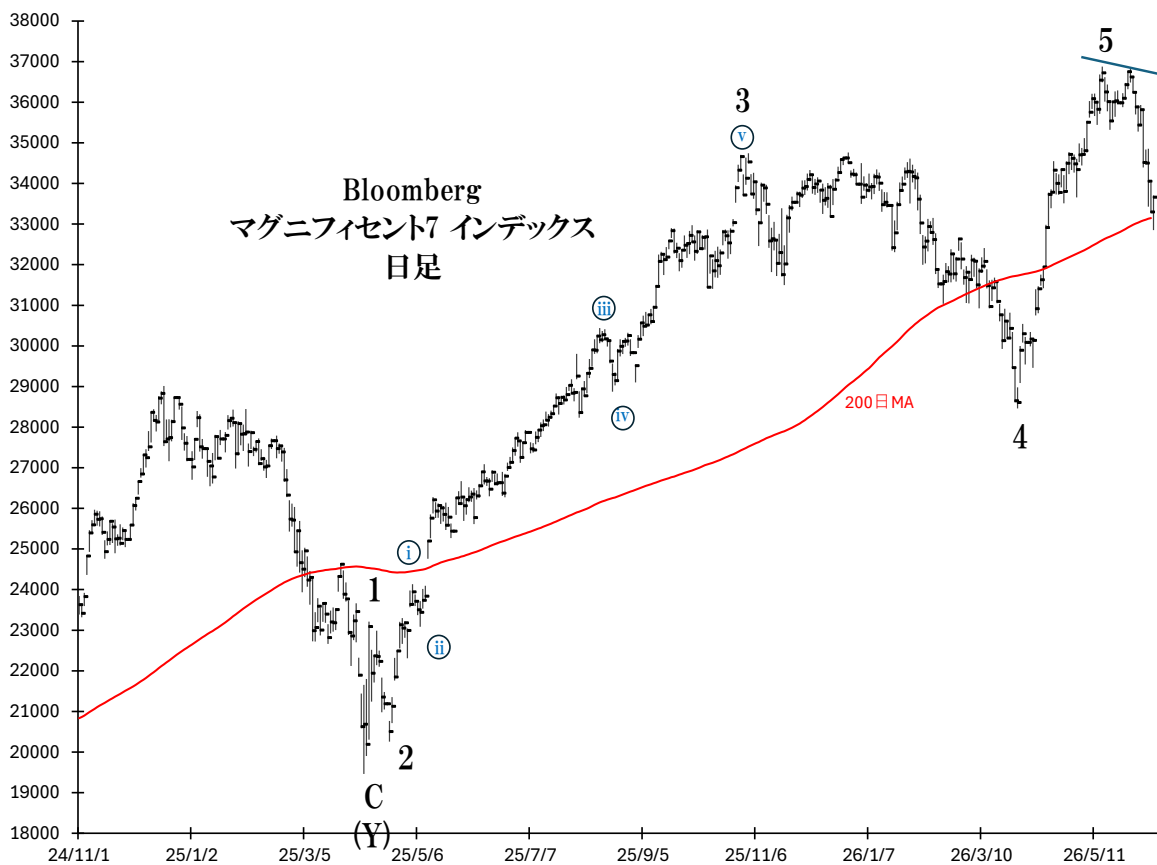
この指数が最高値を付けたのは5月14日です。それはナスダック総合(6月1日)、S&P500(6月2日)、ナスダック100・SOX指数(6月3日)、そしてNYダウ30(6月5日)、これら指数に先行しており(未確認)重要な天井を付けた可能性があります。

6月11日には5月高値からの下げ率が一時11%に迫りましたが、急速に下げ渋りました。200日MAが意識された形です。短期的にはリバウンドがありそうですが、遠からず200日MAを割り込み下値試しの展開となるでしょう。

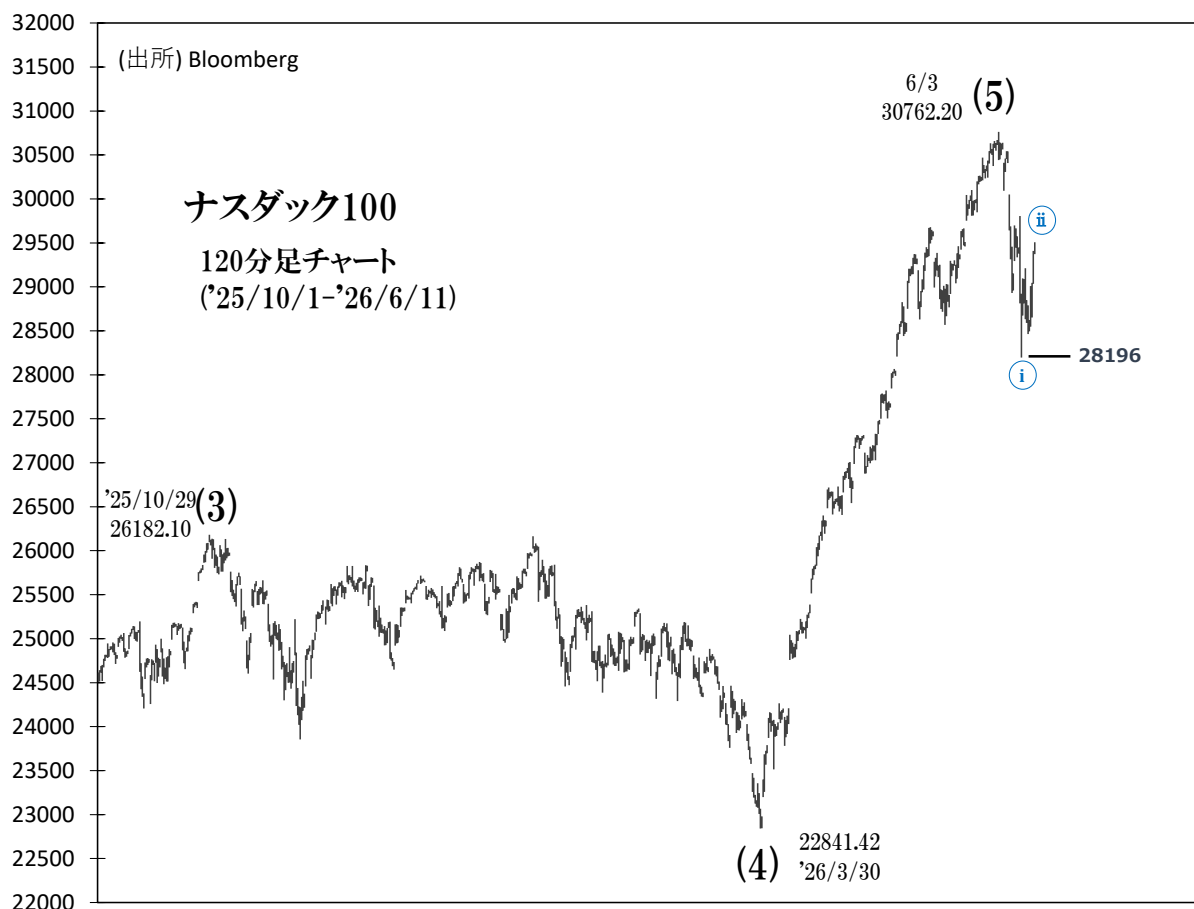
[ダウ輸送株平均] 第2波リバウンド



[マグニフィセント7] 200日 MA を一時割り込む



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

22,841(3/30 安値)からの上昇・第(5)波は、30,762(6/3 高値)で完了した可能性があります。

28,196(6/10 安値)からは、マル ii 波によるリバウンドとみられ、フィボナッチからの想定レンジは[29,479-29,782]です。11 日には一時 29,506 まで上昇し想定レンジに入りました。

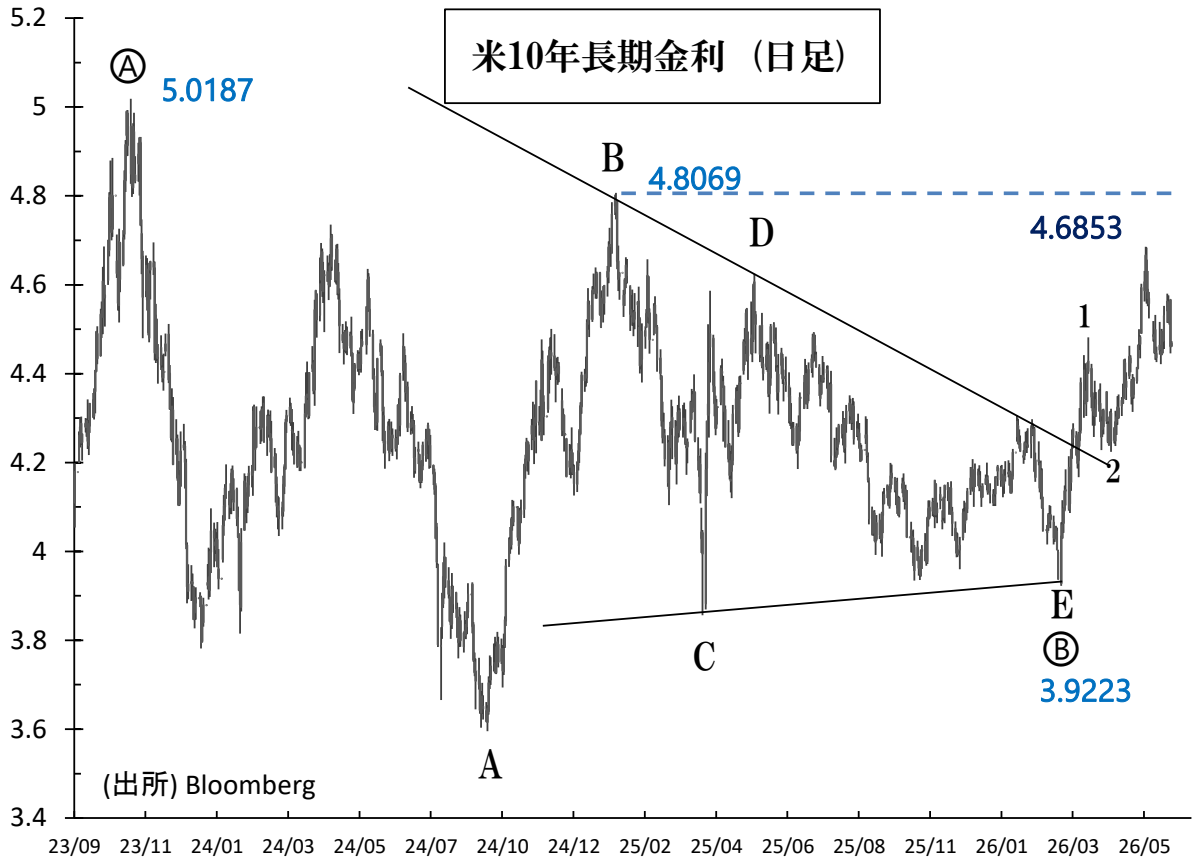
米 10 年長期金利は、今年 3 月の 3.9223%を起点とする◎波の金利上昇に入っています。

◎波は 23 年 10 月のⒶ波トップ=5.0187%を大きく上回る展開となるでしょう。

◎波の金利上昇は、今後数年続くと予想しますが、これは、景気悪化に関わらず物価と長期金利が上昇する「スタグフレーション」を示唆するものです。

この見方通り金利上昇が続いていけば、AI・半導体株のバリュエーションは低下し、株価は大きく下落するでしょう。

[米 10 年長期金利] 5.02%を上回る展開へ



米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

今回より 2011 年からの波動カウントを見直します。修正後カウントでは、2011 年～24 年のドル/円上昇を「ダブル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)」とみます。なおカウント修正後も、2028 年に向けた円高シナリオに何ら変わりはありません。

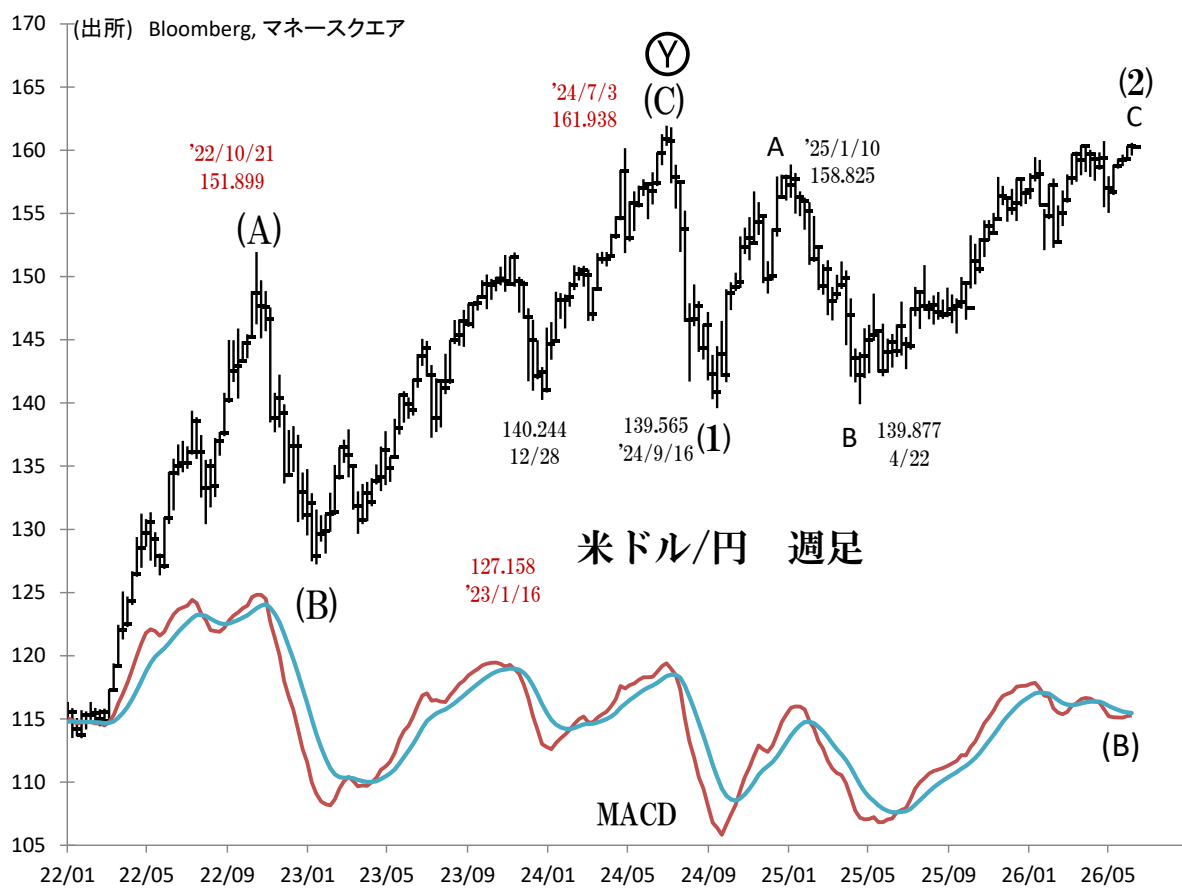
日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在 1 ドル=142-143 円です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準より、極端な過小評価が続いています。

さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた 20 年≡金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は 40 兆円程度とされます。



【週足 エリオット波動分析】

24年9月(139.565円)からの第(2)波「フラット(A-B-C)」は終わったか、終わりつつあります。次に想定されるのは第(3)波のドル安・円高です。

第(3)波のスケールは、第(1)波の 1.618 倍～2 倍になるとみるのが適当です。

もっとも、アナロジー分析からの「7月～8月にかけて140円処への急激な円高」という見立ては相当に難しくなったと思われます。

はたして6月16日(火)に予想される日銀利上げは円高へのトリガーになるのでしょうか。注目してみましょう。



【日足 エリオット波動分析】

日足の波動カウントも、今回より見直しました。第(2)波中 C 波の上昇が 25 年 4 月(139.877 円)から展開中であり、それは 5 つの波(マル i~マル v)で構成されます。

154.983 円からはマル v 波に位置付けられます。マル v 波は順当に 160.697 円を上回るか、あるいは 160.697 円を抜けずに「切り捨てられた第 5 波(truncation)」になるかもしれません。

金利差からのドル/円推計値

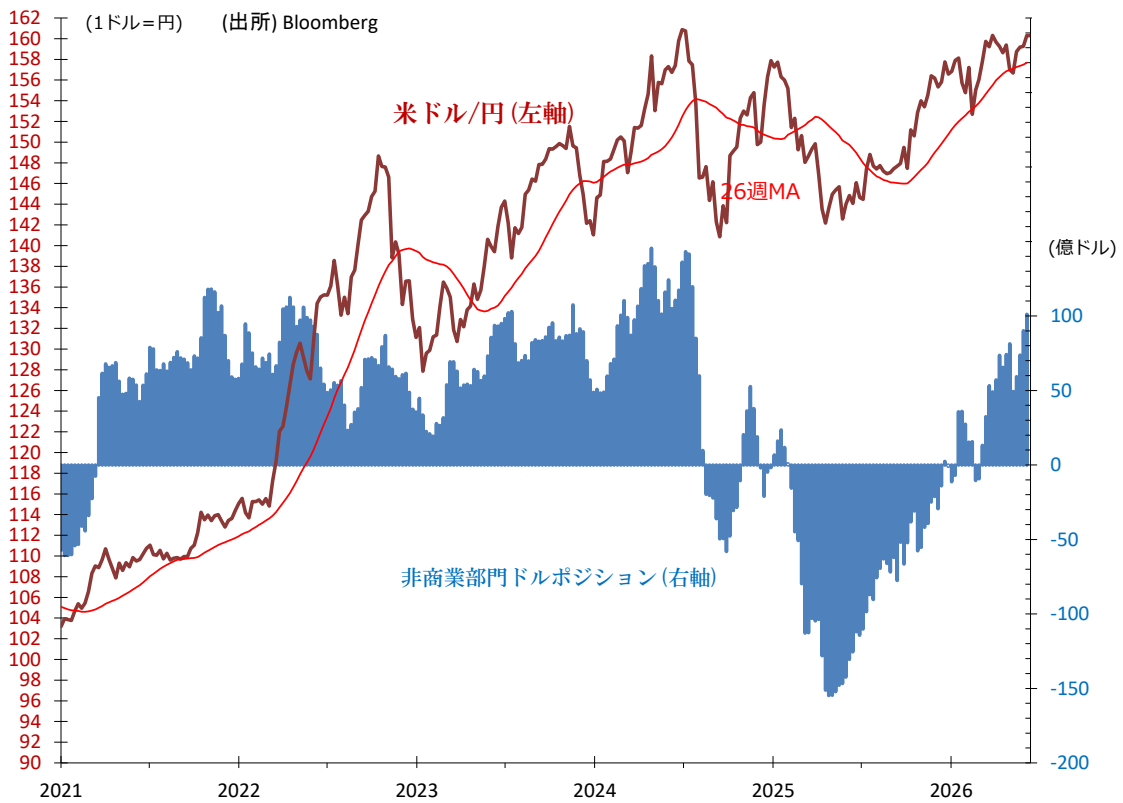
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[142.229 円]です。

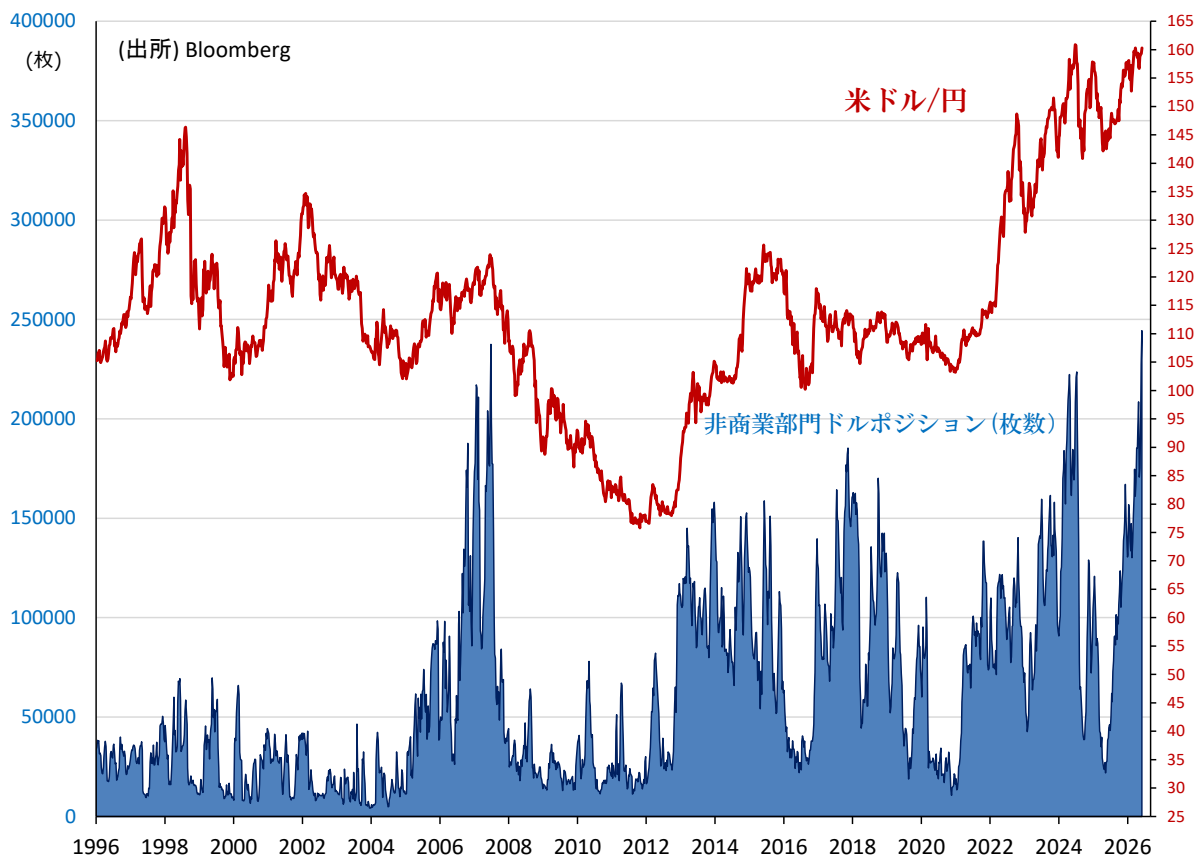
円売り持ち高が 3 週連続で拡大 (2026 年 6 月 2 日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の 90.0 億ドルから 101.0 億ドルへ 4 週続けて拡大しました。円売り持ち高は、円買い介入が入ったときの水準(81.2 億ドル、4/28 時点)を大きく上回っています。

円売り枚数は過去最大に

投機筋の円売り持ち枚数は、6 月 2 日時点で 24.44 万枚。これは 07 年 6 月 26 日時点の円売り 23.74 万枚を上回る、過去最大の規模です。





ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

25年7月(96.377)からの(X)波は100.643(3/31)を以て終了しました。パターンは「エクспанディング(拡大)・トライアングル」です。

4月からはドル安トレンド(A-B-C)が展開中とみられ、このドル安は数年間に及ぶと思われます。

最初の下降波・第(i)波は97.632(4/17)で終わり、そこからは第(ii)波のリバウンドとみられます。第(ii)波はフラット(a)-(b)-(c)を形成し、それは終わりつつあります。

97.496を終値ベースで下回ると、第(iii)波によるドル安トレンド入りの可能性が高まります。ひとたび第(iii)波のドル安トレンドに入ると、ドル指数は今年中に95.551を明確に下回ると見られます。

なお、100.643を超えると上記見通しはキャンセルされ、別の波動カウントに替える必要があります。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
